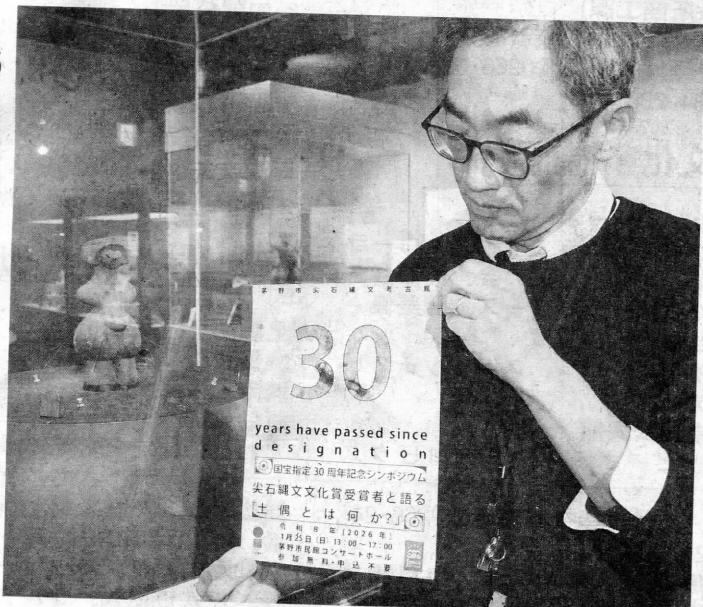


土偶つて何だろ?

茅野市尖石縄文考古館は、市内から出土した縄文時代の土偶「縄文のビーナス」の国宝指定30周年記念シンポジウム「尖石縄文文化賞受賞者と語る『土偶とは何か?』」を、25日午後1時5分に同市の茅野市民館で開く。同賞の受賞者ら土偶に詳しい専門家6人を迎えて、土偶が縄文時代にどんな存在だったのか話してもらう。一般の人々に分かりやすく、縄文や土偶に関心を高める機会に企画した。

縄文のビーナスは1986年、同市米沢埴原田の棚畠遺跡からほぼ完全な形で出土した。高さ27センチ、重さ2・14キロの大型土偶で、約5000年前の縄文時代中期に作られたとされ、妊娠した女性の姿を表しているという。つり上がった切れ長の目や膨らんだ腹部、逆ハート形で張り出した尻などが大きな特徴。95年6月15日、縄文時代の遺物として第1号の国宝に指定された。

25日茅野市民館で記念シンポ



シンポジウムは2部構成。第一部では、同賞受賞者3人が「私が考える土偶」と題してそれぞれ基調講演する。3人は第10回受賞者の三上徹也さん（大曾調査会理事）、第15回受賞者の瀬口眞司さん（滋賀県文化財保護協会企画整理課長）、第21回受賞者の阿部昭典さん（千葉大学大学院人文科学研究院教授）。

第2部はシンポジウムで3時15分から。三上さん、瀬口さん、阿部さんと、藤森英一さん（明治大学黒耀石研究センター補助研究員）、佐賀桃子さん（山梨県埋蔵文化財センター主任・文化財主事）、同賞の第3回受賞者の会田進さん（元長野県考古学会会長）をパネリストに語り合う。同考古館学芸員で市教育委員会文化財課考古館係長の山科哲さんの進行で、土偶の出土状況や形の変化、使われ方などについて意見を交わす予定。

同考古館は「一般向けのシンポジウム。土偶つて何だろ?と楽しみながら考えてもらえたなら」と来場を呼び掛けている。無料。申し込み不要。問い合わせは同考古館（電話0266・762270）へ。（手塚洋一）

25日に開く「縄文のビーナス」国宝指定30周年記念シンポジウムのチラシ。左後方が茅野市尖石縄文考古館に展示されている縄文のビーナス